評論

英国における市民性教育研究の視点から考える環境教育

水山 光春（京都教育大学）

Environmetal Education from the Viewpoint of Citizenship Education in England

Mitsuharu MIZUYAMA
Kyoto University of Education
(受理日 2009年6月12日)

1. 問題の所在と英国の市民性教育

環境教育の究極の目的が「より良い環境づくりの創造的な活動に主体的に参画し、環境への責任ある態度や行動がとれる**市民の育成**」¹⁾にあることに、まず反対はないだろう。しかし、市民としての実践力や、総説執筆者が引用するところの「有能感」を育てることは、実は容易なことではない。しかるに従来の環境教育は、これらの実践力や有能感、すなわち環境を通した「市民性」の育成に、あまりにも経験的・楽観的ではなかったか。

近年、我が国の内外で「市民（性）」や「シティズンシップ」の名を冠した教科や教育が注目を浴びている。このような教育の発祥の地の一つでもある英国のシティズンシップ教育に基づいて端的に述べるならば、それは「子どもたちが知的で思慮深く、責任感を有する市民となることを手助けするために、現代民主主義社会を支える市民的資質としての知識と技能と価値を、自らの人生や学校や近隣、さらにはより広いコミュニティに積極的に関わることを通して学ぶ教育」²⁾のことである。この学習プロセスを順を追って示すと、その根本には理念としての公正さやデモクラシー、責任感や他者への思慮深さなどがあり、それらを背景にデモクラシーを実現するための知識・理解、技能や価値の学習が行われ、これらはコミュニティの場での参加や活動として実践される³⁾。実践は、責任感や他者への配慮として意識にフィー

ドバックされ、循環する。この循環を通して、子どもたちは社会的な有能感を身につける。

また、シティズンシップ教育の根底には、「社会的・道徳的責任」「政治的リテラシー」「コミュニティへの関わり」の三つの基本要素（ストランド）があり、これらは「政治的リテラシー」を通して相互に深く結びついている。よりマクロに見ると、「社会的・道徳的責任」「政治的リテラシー」は知的市民性（informed citizenship）を形成し、さらに知的市民性をもとにした「コミュニティへの関わり」は活動的市民性（active citizenship）を育成する。そして、知的市民性と活動的市民性を通した社会的有能感の形成が、英国におけるシティズンシップ教育の究極の目標となっている。

2. 環境市民性の育成と三つのストランド

1) 政治的リテラシー

ここでの政治的リテラシーとは、B・クリック言うところの広い意味での「政治」、つまり「多種多様な価値と利益の間での果てしなく続く妥協の過程」⁴⁾で求められるものであり、「知識と技能と価値を通して公共生活に実質的・効果的に関わろうとする力」⁵⁾である。直接的な政治参加としてでなく、政治的リテラシーをこのように幅広くとらえると、日常の学校や学級における環境に関わる具体的な問題解決や、活動なども政治的リテラシーの中に含まれる。

2) コミュニティへの関わり

クリックは、「為すことによって学ぶ」ことを重視する。また、いわゆる「大きな問題」や大きな取り組みを好まない⁶⁾。それらはともすれば、そこに関わる個人を全体の歯車とし、一人一人の有能感を損なう可能性がある。つまるところコミュニティは、学習者個々人が直接関わることによって社会的な有能感が得られる最小の単位なのである。

3) 社会的・道徳的責任

環境学習を進めるにあたって、提案型や参加・体験型の学習が取り入れられることが多い。しかし、これらの学習は、往々にして提案のしっぱなしであったり、その成果が個人に還元されすぎるきらいがある。また、そこでは「責任」の観念が

曖昧である。それに対してクリックは、学習における「行為の結果の予測としての責任」を重視する。つまり、責任は個人に帰属する道徳的責任のみならず、他者への思いやりや社会への責任をも含んでいる。

シティズンシップの視点を取り入れた環境学習としては、校庭の改造、町ワーク、フェアトレードなどの取り組みが英国ではトレンドであるが、これらの中で比較的成功している事例には、上記のストランドが巧みに埋め込まれている⁷⁾。そこでは三つのストランドは、いわば立方体を支える縦・横・高さに例えることができる。つまり、縦・横・高さのいずれが欠けても、環境シティズンシップの教育は質量のあるものになり得ない。

3. 自由主義・共同体主義・ポスト共同体主義

シティズンシップに関する議論をさらに掘り下げると、自由主義と共同体主義（あるいは市民共和主義）の対立・緊張関係に行き着く。自由主義的シティズンシップは、個人の自由や平等を追求するが、個人の自由の過度の追求は個人をますますアトム（核）化させてしまう。他方、共同体主義的なシティズンシップは、共同体としての“共通善”を追求するが、共通善の過度の追求は共同体を専制化し、共同体の維持を自己目的化してしまう。ちなみに、若者の政治的無関心を問題視する日本や英国における最近のシティズンシップ教育への関心は、多分に共同体主義的なシティズンシップを指向している。

さらに近年、環境や持続可能性の視点から第三のシティズンシップを模索する動きがある⁸⁾。それは、自由主義的シティズンシップも市民共和主義的シティズンシップも、共に市民－国家間の互恵的な「契約」観に基づいているのに対して、新しいシティズンシップではそのような互恵性を前提にすべきでないと主張する⁹⁾。この視点をポスト共同体主義として三者の関係をまとめると表1、図1のようになる。

これからの英国における環境シ

ティズンシップの教育は、これら三つのシティズンシップの相互批判の形で展開していくことになるだろう。

【注：引用文献】

- 1) 日本学術会議, 2008.8, 「(提言) 学校教育を中心とした環境教育の充実に向けて」, p.4, 日本学術会議HP (<http://www.scj.go.jp>) 参照 (2009.5.30).
- 2) DEEE, 1999, *The National Curriculum for England*, DFEE/QCA, p.12.
- 3) DFEE/QCA, 1998, *Education for citizenship and the teaching of democracy in schools*, DFEE/QCA, [1.5] p.7.
- 4) クリック, B., 2004, 『デモクラシー』岩波書店, 東京, p.189.
- 5) DFEE/QCA, 1998, *ibid.*, [2.11] p.13.
- 6) Davies, I., Hogarth, S., 2004, *Political Literacy: Issues for Teachers and Learners, Citizenship and political Education Today*, Macmillan, N.Y., p.182.
- 7) Flanagan, B., et al., 2004, *Democracy through Citizenship*, Institute for Citizenship, York.
- 8) Huckle, J., 2008, Sustainable Development, Arthur J., et al. (Eds), *Education for Citizenship and Democracy*, Sage Publications, London, pp.342-355.
- 9) Dobson, A., 2003, *Citizenship and the Environment*, Oxford University Press, London.

表1 環境シティズンシップのフレームワーク

形態	自由主義的	共同体 (市民共和) 主義的	ポスト共同体主義的
範囲	世代内・近距離	世代間・遠距離	超世代・超距離
主体	個人	市民	動物・自然
中心概念	権利 (契約)	義務 (契約)	責任 (非契約)
「徳」	穏健・寛容・自己批判	信頼・互恵性・参加	配慮・共感・想像力
課題	統一性の付与	差異性の承認	非対等関係における責任の取り方

自由主義, 共同体主義 世代内・近距離 対等な関係, 契約	longleftrightarrow	ポスト共同体主義 世代間・遠距離 (超世代・超距離) 非対等な関係, 非契約
自由主義, ポスト共同体主義 個の差異性の尊重	longleftrightarrow	共同体主義 共同体の統一 (共通善) の尊重
共同体主義, ポスト共同体主義 義務・責任の重視	longleftrightarrow	自由主義 権利の重視

図1 三つのシティズンシップの相互批判関係